

村落景観の民俗的意味

—東西日本論序説—

福田 ア ジ オ

-
- | | |
|------------|--------------|
| 1 資料としての景観 | 3 屋敷と屋敷神・墓地 |
| 2 集落の色と形 | 4 東西対比の民俗的意義 |
-

論文要旨

日本の民俗学研究は従来集落その他の景観を資料として活用してこなかった。村落内部で伝承されてきた民俗事象のみに関心を集中させてきた。そのため、外見として示される景観のもつ意味については検討されることなく放置されてきたと言える。しかし、日本の中央部でも、関東・中部地方と近畿地方では東の緑、西の黒というように集落景観に大きな相違があり、さらに村落が作り出したさまざまな事物においても相違がある。この相違が民俗学にとっても重要な研究課題であることを主張した。

東西の村落景観の相違を対比的に整理すれば、東の緑、西の黒という集落景観の印象の相違を作り出しているのは、家々の集合状況としての集村か小村かの違い、屋敷周囲の施設である屋敷林、垣根、塀等の有無の相違である。そして、それを基礎に、個別屋敷の様相、小祠や墓地の配置などにおいてもそれに対応した相違がある。その外見としての村落景観が示すものは、その社会の内部秩序の反映であり、家を強調する東とムラを強調する西をそれぞれ示している。東の村落景観は個別屋敷を閉鎖的な空間として示し、生活に必要な装置をその屋敷内外に揃えておこうとしてきた。単に生産・生活という現世の装置だけでない。神仏を祭る施設、あるいは墓地という他界につながる施設まで屋敷内あるいは屋敷続ぎに設けている。屋敷を拠点とした家の独自性、個別性、完結性を強調する社会が作り出した景観と言ってよいであろう。それに対して、西の村落景観は個別の家が明確ではなく、集落全体としてひとまとまりになっていて、ムラとしての結集を家々の密集と個別の家の開放性で表示していると言えそうである。個別屋敷は居住用であり、その他の生活・生産に必要な施設は村落として設定している。この家中心社会としての東を象徴する村落組織が「番」組織であり、ムラ中心社会の西を象徴する村落組織が「衆」組織である。

以上のことを論じることによって、民俗学研究にとっても景観が重要な資料となり得ることを述べたものである。